

[巻頭言]

「坂道と別刷り」

東北文化学園大学 医療福祉学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
小林 武

小学校の帰路に坂があった。その坂はとても急で、長くて、登っている時間を随分と長く感じた。「これを上れば家はもうすぐ」そう思いながら、小さい体に大きなランドセルを背負って毎日坂を登った。冬にはそれこそ風雪に耐えながら真っ白な視界の中をただただ無心に一步一步足を運んだ。春には漂う草花の香りを感じながら、夏はアブラゼミの声を聴きながら、秋には赤黄の枯れ葉を踏みしめて……。あれから約50年が経った。坂の周りの景色は随分と変わった。途中にあった大きな栗の木や坂の上の雑貨屋ももうない。景色だけではない。坂の下から見上げても、記憶にあるような長さや傾斜ではなくなっていた。登ってみても、特に苦もなく登り切れた。地形が変わったわけではないのに。

さて、リハビリテーション学科紀要「リハビリテーション科学」第16巻が発刊された。令和になって初めての発刊である。寄稿された先生、査読者、編集等にご尽力いただいた先生に深く感謝申し上げる。

紀要は大学・研究所などの学術的定期刊行物であり、一般に若手研究者の研究発表の場として登竜門的な意味を持って利用されることが多い。学術論文の構成はおおよそ定式化されているとはいっても、最初はどのように書き進めたらよいのなかなか定まらない。科学論文作成の手引本を手にしたたり、先輩や同僚のアドバイスを受けても、主張したいことがそのとおりに表現できないジレンマはなかなか解消しない。厳しい査読コメントに胃が縮む思いをすることもある。そんな産みの苦しみを経て、論文が公表されたときには安堵感に包まれることになる。何回か繰り返すうちに、論文作成ツールの活用法や執筆の段取り、主題や論点の整理の仕方、発想転換方法等、自分なりの論文作成スキルが身についてくる。

本学科の紀要には、院生、卒業生、共同研究者も投稿できる。学科教員以外ではこれまで2編が掲載されるに留まっている。院生あるいはまた臨床で働く卒業生などが、論理的思考を育むとともに業績を積み重ねる場として紀要を活用してもらえるとよいと思う。特に最初の頃は、あまり間隔を空けずコンスタントに投稿していただくとよい。読み手側も、内容だけではなく、研究者の論文作成スキルが向上していることを感じることができる。また、査読というと批判的吟味が大きなウエイトを占めがちだが、査読担当者にはより支援的・教育的な提案・指導を是非お願いしたい。リハビリテーション学科紀要「リハビリテーション科学」には、投稿者と査読者、編集委員会が一緒になって、科学的思考が備わった感性豊かで創造的なリハビリテーション専門職を育む母体となっていたいただきたい。そして、論文を書いてみたい、投稿してみたいと考えている卒業生には、母校の紀要であるこの「リハビリテーション科学」への投稿を特にお勧めしたい。

年末に、古い資料ファイルや自分の論文別刷りを入れている書棚1架を整理した。昔の別刷りを見返していると、難渋した考察の文章や時間をかけて作成した図表などあちこちに留まり、その度に当時の苦悶した状況が鮮やかに思い出された。今の自分と環境ならもっと上手くできたのに、と思うと同時に、今よりも集中して必死に取り組んでいた状況が頭の中に蘇った。昨夏に小学校の通学路にあった坂の下から上を見上げ、登ったときと同じ気持ちになった。ノスタルジックな感覚とともに、図らずも、精神運動領域と認知領域の2つの面から人間としての成長を感じた令和元年であった。